

相づち使用と対人関係

大浜るい子

Interpersonal Relationship and the use of Aizuchi

Ohama Ruiko

キーワード：相づち、表現種類、頻度、性、年齢

0 はじめに

日本語の相づちについては使用頻度が高く、使用される表現も多種多様であるといわれる(水谷1988、メイナード1993)。しかしいかなる場面でも、またいかなる相手にも常に高頻度で多種類の相づちが使用されているわけではない。相づちもまたその他の表現同様、待遇的な性格があるからである。ここでは、社会的地位や性の異なる対人関係(同年代：年上、同性：異性)のなかで、相づちの使用がどのように変化するかを観察する。一人の話し手(20代の女性)が、会話の相手を変えることによって相づち使用の頻度や表現にどのような変化が現われるかを調べる。会話の相手は同年(20代)の相手10名(女男各5名)年上(50~60代)の相手10名(女男各5名)の計20名とし、いずれの相手とも同様の話題について会話をした。会話時間は相手によって2分38秒から16分32秒までと様々であったが、合計2時間31分53秒の会話を資料とする。

1 出現した相づち

相づちは堀口(1997)が整理しているように、研究者によってその認定基準は様々であるが、ここでは表現形式を中心に認定した。機能や使用者、出現位置による認定は、一見明確な基準のように見えながら、分類者が暗黙のうちに前提にしていることを不問にしてしまう危険性がある。そのため誰にとっても明確な、表現形式による認定を採用した。なかでも小宮(1986)の2分類がより単純でより形式に忠実なので、ここでは小宮を参考にし、その上でいくらか下位区分を増やし、以下の16の系を区別した。但し、「そう系」と「文末系」については、自己主張型、疑念表明型、受入表明型、同意暗示型、同意表明型

を区別し、型別に整理した。

感声的表現の相づち(感声的で概念を指さないもの)：

あ系、うん系、え系、お系、はい系、ふーん系、へー系、ほー系、まあ系、

概念的表現の相づち(意味内容のあるもの)：

そう系、すごい系、本当系、うそ系、いい系、文末系、繰り返し系

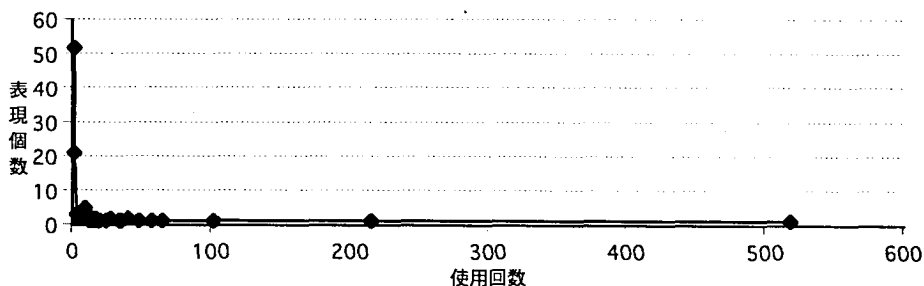
相づちと認定された全表現は表1に示す通りである。その際、複数の系や型が組み合わされているものは離して、別に集計した。相づち表現の組み合わせについては6で取り上げる。

2 相づち表現とその使用頻度

まず全体的に見ると表現種類としては114種で、総計1606個の相づちが使用された。表1から明らかのように、114種の内、非常によく使用される相づちとあまり使用されない相づちがある。「うん」(518回)や「あー」(215回)はそれぞれ全使用の32.3%、13.4%にもよる高使用頻度表現で、この2種で全相づち使用総数のほぼ半数(45.7%)を占める。いずれも「感声的表現」であるが、この二つの表現は他の表現の使用頻度とは比較にならないほど高い。「概念的表現」の「繰り返し」の101回も少なくない(6.3%)。

反対にたった1回の使用であった表現は52種もあり、全表現種類数114の45.6%にのぼる。使用回数2回という21種類の相づち表現を加えると、全表現種類数の64.0%になる。そして、これら6割を占めるあいづち表現は全相づち使用総数から見ればわずか5.9%にすぎないことも分った。日本語では頻度も高く、

図1 使用回数から見た相づち表現の種類数



種類も多いと言われるが、個人が使用する表現という観点から見ると、高頻度で使用される相づちは非常に限定されており、その他の多くの相づちの使用はごく限られていることが分かる (図1参照)。

感声的表現と概念的表現の使用割合は1163件：443件で、感声的表現が全体の72.4%を占め、圧倒的に多いことが分かる。また、使用回数1～2の相づち表現では73種中63種が「概念的表現」に属しているが、概念的表現はいずれの系も様々な文末表現を取りうるので、その異なりを別の表現と分類したことからこのような結果になった。たとえば今回の調査では「そう系」で36種類の異なり表現が観察されたが、相づちの機能を考える時、特に概念的表現の場合には系と共に文末形式を考慮した考察が欠かせないだろう。われわれが提示した5つの型は、この点を考慮した分類案である。

3 相づち使用の頻度と談話内でのふるまい

全談話時間9113秒 (2時間31分53秒) 内に現れた相づち総数は1606個で、相づちは平均5.7秒に1回の割合で出現している。しかし個人別に見ると、相づち使用が多い相手 (Om1, Ym4, Yf10) と少ない相手 (Om4, Ym2) があり、また相づち以外の実質的な発言をどの程度しているかという点でも、相手によって異なる。以下、同年：年上、同性：異性を比較し、対人関係によって相づちの使用頻度や談話内でのふるまい方に違いがあるかどうかを見る。

3-1 社会的地位 (同年：年上) から見た相づちの使用頻度と談話内でのふるまい方

対同年と対年上の相手では、以下に示すように相づちの使用頻度に違いはなかった。

対同年の相手：平均5.5秒に1回の割合
(5128秒の間に923回)

対年上の相手：平均5.8秒に1回の割合
(3985秒の間に683回)

図2は個人別に示したものであるが、これを見ても、同年の相手と年上の相手によって使用頻度に違いは見られない。

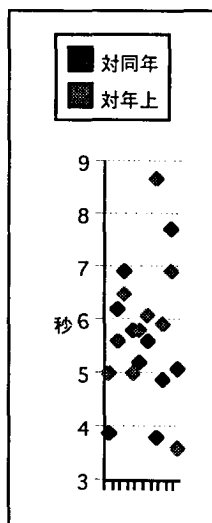


図2 相づち使用の間隔 (秒) 比較
対同年：対年上

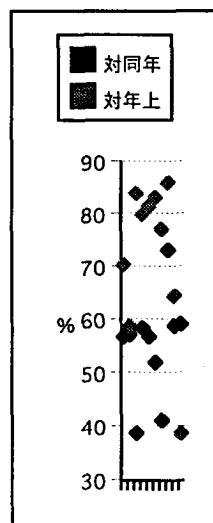


図3 聞き手役割度比較
対同年：対年上

ところで、相づちは相づちのみで出現することが多いが、相づち+発話として出現することもある。だから、単に相づちが多いからと言って実質的な発話を行っていないとは言えない。そこで、相づちであれ、発話であれ、すべての発言を数え上げ、その中で占める相づちのみの発言を「聞き手役割度」として数値化した。その割合を比較すると以下のようになり、対年上の方が対同年よりも聞き手役割度が大きい（図3参照）。

同年の相手に対する聞き手役割度：55.3%
 年上の相手に対する聞き手役割度：72.5%

以上の点から明らかになったことは以下の通りである。

- (1) 年上の相手には発話はせずに、相づちのみを打ち、聞き手役割を引き受ける傾向にある。
- (2) 同年に対しては発話はより頻繁になされるが、相づちに代わって発話がなされるのではなく、相づちに加えて発話がなされる。すなわち
- (3) 相づちの頻度は対同年と対年上では違いは見られなかった。

3-2 性（同性：異性）から見た相づちの使用頻度と談話内でのふるまい方

対同性と対異性の相手でも、以下に示すように相づちの使用頻度に大差はなかった。

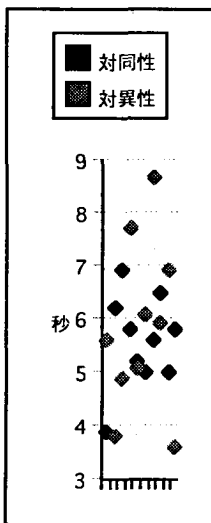


図4 相づち使用の間隔(秒)比較
 対同性：対異性

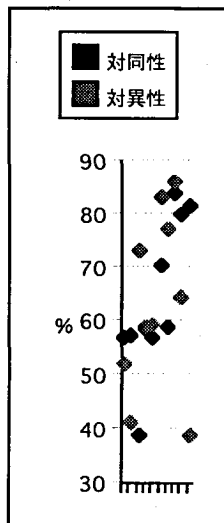


図5 聞き手役割度比較
 対同性：対異性

対同性の相手：平均5.5秒に1回の割合
 (4050秒の間に729回)

対異性の相手：平均5.8秒に1回の割合
 (5063秒の間に877回)

しかし、図4が示すように、対同性ではどの相手にもほぼ同程度の使用であるが、対異性では相手によって使用頻度に大きな差がある。すなわち相づちをよく打つ相手とあまり打たない相手がいる。何がその違いを作っているのかは今後の課題だが、同性ではいずれの相手でも同じ程度であるのとは対照的である。

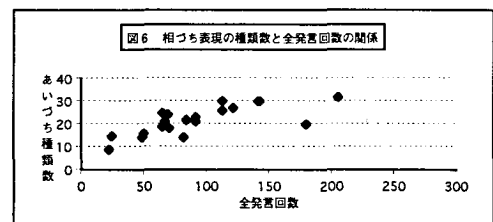
次に聞き手役割度だが、以下の通り同性：異性で違いは見られなかった（図5も参照）。

同性の相手に対する聞き手役割度：64.3%
 異性の相手に対する聞き手役割度：63.5%

対同性と対異性では相づちの使用頻度のみならず、談話内での聞き手役割の度合いもあまり変わらない。相手が同性の女性であるか、異性の男性であるかは相づちや発話の頻度には影響しないと言える。ただ、相手が男性である場合、相づちをよく打つ相手とそうでない相手があった。相づち使用には、ここで想定した性と社会的地位以外の条件があることを示唆している。

4 相づち表現のヴァリエーション

次に、会話中に使用されるあいづち表現の種類数について見る。表現種類数は会話の相手によって大きく異なり、32種類から9種類の幅があった。図が示すように、表現種類数は相づち使用数と緩やかに対応している（図6参照）。相づちを多くうれば表現種類も多く、相づちが少ないときには種類も少ないという傾向が見られた。



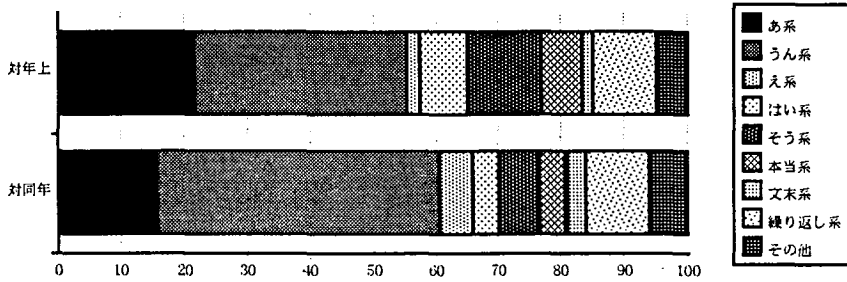


図11 系別に見た相づち使用頻度比較 (対年上:対同年)

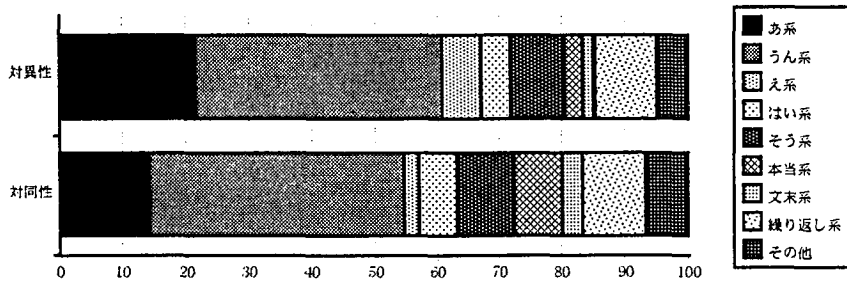


図12 系別に見た相づち使用頻度比較 (対異性:対同性)

5-1 対同年と対年上で使用傾向の異なる相づち表現

対同年と対年上で使用傾向の異なる相づち表現は以下の通りである (図11参照)。

対同年に多い相づち表現: うん系、え系

対年上に多い相づち表現: あ系、はい系、そう系、本当系

「うん系」と「はい系」

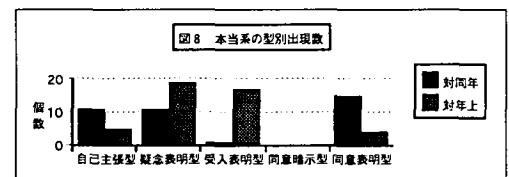
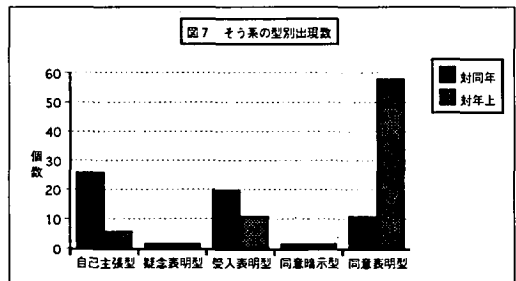
「うん系」が対同年に多く、「はい系」が対年上に多いのはわれわれの直感に一致する。「うん系」はくだけた形なので年上にはむしろ丁寧な形の「はい系」が多く使われると考えられる。しかし、「うん系」は「はい系」に比べて圧倒的に高出現で、対年上にも非常に多く用いられている。「うん系」と「はい系」の使い分けには、単に「くだけた形のうん」と「丁寧な形のはい」という対立ではない要因があると思われるが、今後の課題である。

「そう系」と「本当系」

「そう系」は対年上により多く使用されたが、中でも「同意表明型」と分類されたもの(「ね」「よね」のついた形)の多さが目についた。他方で「そうです、

そうですよ」などの「自己主張型」や「そうか」「そうですか」などの「受入表明型」が対同年に多く使用された。同年には自分の意見を主張したり、相手の意見を中立的に受けとるという態度であるが、年上には同意を表明する傾向があるという結果がでた (図7参照)。

「本当系」も「そう系」同様、対年上により多く使用されている。その意味では「そう系」と似た働きがあると思われる。ただ「本当系」は「そう系」とは異なり、受入表明型(「本当」なるほど)は対



年上に多く、同意表明型（「なるほどね」）は対同年に多いという型レベルで「そう系」とは異なった傾向が見られた（図8参照）。「そう系」と「本当系」には似た意味もあるが、また異なった待遇の意味があるのかも知れない。これについては今後の課題である。

「あ系」と「え系」

「あ系」は対年上に多く、そして「え系」は対同年に多く使われている。「あ系」は相手の発話内容から重要なことを気づかされたり、また納得させられたりすることを示す相づちである。相手の発話を情報価値の高いものとし、十分受け入れ可能なものであることを示しながら、年上を立てていると思われる。

他方「え系」は相手の発話内容に違和感があり即座に受け入れられないことを示す相づちである。この相づちは出現環境が少し異なる。すなわち「あ系」はターンを取得する場合にも取得しない場合にも使用されるが、「え系」はターンを取得しない場合には使用されず、専らターンを自らの意志で取得する「自己選択」の場合に、発話に先立ち用いられることが多い（大浜2001）。ターンを自己選択するという行為自体が年上に対しては控えられる（大浜2000）ので、それと連動して「え系」も少なくなっていると思われる。

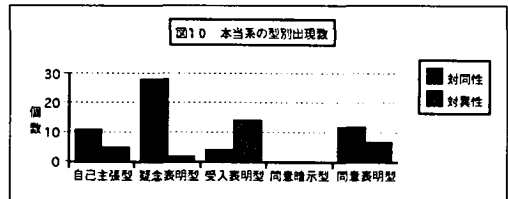
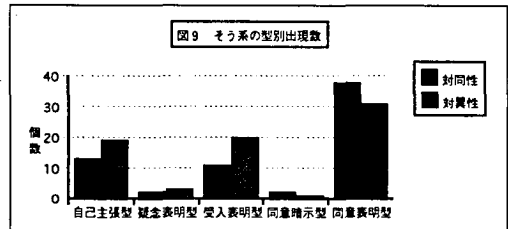
「あ系」と「え系」が対年上と対同年に使い分けられていることから考えると、これも「そう系」のところでも述べたように、年上には同意傾向を見せ、同年には非同意と共に自分の意見を表明する傾向があることを示していると言えよう。

5-2 対同性と対異性で使用傾向の異なる相づち表現

対同性と対異性で異なる使用傾向にあった相づち表現は以下の通りである（図12参照）。

- 対同性に多く使用される相づち表現：本当系、
- 対異性に多く使用される相づち表現：あ系、え系、

「本当系」で大きな差を作り出しているのは疑念表明型である（図10参照）。疑念表明型とは「本当、ほんとに、ほんまに、まじで」であり、疑念というより、むしろここでは相手の情報が驚きの対象であったことの表明であろう。



ところで「あ系」と「え系」であるが、このいわば対立する態度を示す2つの系の相づちがどちらも対異性に多く使用されていることは興味深い。対同性には「本当系」で相手の言うことに異議を唱えず受け入れるのみであるが、対異性には相手の意見に感心や納得をし、他方で異議を唱えるという、いわば相手を受け入れる方略と相手を拒否する方略を使い分けながら会話を展開させている。異性に対して異なる2つの方略をどのように使っているのか、すなわち受け入れて拒否するのか、拒否して受け入れるのか、興味深い問題だが、そのためにはより詳細な会話の観察が必要である。

5-3

以上の観察から、相づちの使用は、対話相手との社会的関係や性によって左右されることが分かった。まとめると以下ようになる。

社会的関係を軸に考えたときには、同年と比較するとより待遇度をあげなければならないであろう年上には以下の方略が使用される。

- (1) 丁寧な表現が選ばれる（はい系）
- (2) 相手の発話が聞き手にとって納得できることを示す（あ系）
- (3) 同意表明の態度を示す（そう系、本当系）
- (4) 相手の発話に違和感を覚えるような態度は示さない（え系を使用しない）

性を軸に考えたときには（1）の方略は関わらない。しかし（2）の方略とある意味では逆の（4）の方略

(え系を使用する)を男性に、そして(3)の方略を女性に対して用いている。すなわち、対年上と対同年では明らかに前者をより高く待遇していたのと比較すると、対異性と対同性には、どちらをより待遇するかという単純な問題ではなく、待遇の仕方が異なると思われる。すなわち、男性には発話内容の重要性を認めたり、また明確に違和感を示すことが待遇的に効果があるのに対し、女性に対してはそのようなことよりもむしろ同意を示す、すなわち共感を示すことが効果的であると考えられているのかもしれない。

6 複合的相づち表現

相づち表現は「はい」「うん」「あー」など単独で使用されることが多いが、いくつかの相づち表現が組み合わせられて「あーはい」のように複合的に使用されることもある。多くは2つの組み合わせであるが、時には3つ以上のこともある。本資料では1406回の相づち出現時のうち、複合的な相づちが現れたのは183回(13.0%)であった。そのうち3つ以上の相づちが複合されたのはわずか14回であった。表3は複合的使用の順序を示したものである。3個以上の組み合わせは以下のように数えた。「ん、確かにね、ん」=「ん、確かにね」+「確かにね、ん」。表3から明らかのように、複合的相づちの多くは「あ系+α」「うん系+α」であり、そのうちでも「あ系+そう系」が最も多く、それに「あ系+本当系」「あ系+はい系」「うん系+そう系」が続くことが見て取れよう。

表3 複合的相づち表現の先行・後続関係

先行相づち表現 \ 後続相づち表現	あ系	うん系	え系	お系	はい系	ふうん系	へえ系	ほお系	まあ系	そう系	すごい系	本当系	うそ系	いい系	文末系	繰り返し系
あ系		4			3		1						2			1
うん系	3		1		1					2		2				
え系	3	3			3											4
お系	2															
はい系	14								1	2						
ふうん系	1	1														
へえ系																
ほお系																
まあ系	5	6								1						1
そう系	48	16							2		2	1				
すごい系	1				1					1						
本当系	19	3			1											2
うそ系	1	2														
いい系	2	1			1			3								
文末系	2	2														
繰り返し系	8	8			2						2		1			

7 まとめ

本調査によって明らかになったことは以下のことである。

- (1) 相づちには高頻度使用語と低頻度使用語がある。前者には「うん」「あー」「繰り返し」等があり、本資料ではこの3種で全相づち使用の約5割を占めた。後者としては全相づち表現の約6割が1~2回のみ使用であった。
- (2) 談話時間当たりの相づち使用頻度はどの相手グループにもほぼ一定であった。
- (3) 年上の相手よりは同年の相手に対して、相づち以外の発話が多く見られた。
- (4) 異性の相手と同性の相手には相づち以外の発話の量に違いは見られなかった。但し異性の相手では個人間の差が大きかった。
- (5) 相づち使用数と相づち表現の種類数は比例しているようであった。
- (6) 年上の相手と同年の相手で、使用される相づち表現に違いが見られた。対年上には相手の発話を重視し、賛同する表現(あ系、そう系、本当系)が多く使用され、対同年では違和感を表明し自らのターン取得をシグナルする「え系」が多く使用された。また年上には丁寧な「はい系」が多く同年にはくだけた「うん系」が多く使用された。
- (7) 同性の相手と異性の相手では使用される相づちに違いが見られた。同性には同意賛同の「本当系」が多く使用され、異性には相手の発話を重視する「あ系」と違和感を表明し自らターン取得することをシグナルする「え系」が多く使用された。同性の相手と異性の相手を待遇する方略に違いがあることが示唆された。
- (8) 相づちの組み合わせには一定のルールがある。多くは「あ系+α」の形を取っている。

引用文献

- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態 出現傾向とその周辺」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所

メイナード、K・泉子（1993）『会話分析』くろし
お出版

水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』第77
巻第13号

大浜るい子（2000）「日本語のターン交替とあいづち」
『広島大学教育学部紀要』第二部 第49号 153-161.

大浜るい子（2001）「「えっ」の談話機能」『広島大
学教育学部紀要』第二部 第50号 161-170.